

博士学位論文審査要旨

2022年1月5日

論文題目： 社会へ働きかける医療ソーシャルワーカーの可能性
ーマネジメント化による内向き姿勢を克服するためにー

学位申請者： 小畑 美穂

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 埋橋 孝文

副査： 社会学研究科 教授 小山 隆

副査： 県立広島大学保健福祉学部 教授 田中 聡子

要 旨：

本論文は、現在の医療ソーシャルワーク業務が内向き姿勢の傾向にあることを示し、その要因を明らかにすることによって内向き姿勢を克服する方法論を見出すことを目的としており、2部構成となっている。

第I部(1章、2章、3章)では、内向き姿勢になる要因と経緯を探索的に明らかにしている。

第II部(4章、5章、6章)では、内向き姿勢を克服する方法論を調査から導きだしている。

第I部(1章、2章)での検討の結果、マネジメントがもつ管理・統制が医療ソーシャルワーク業務の連携・協働を通し、調整的マネジメントを定着化させ、業務がマネジメント化する要因の一つとなっていることが明らかにされている。

患者への支援は、社会関係にひろがる可能性に開かれた、オーダーメイドの個別化というよりも、支援者が構築したネットワークやケアのマネジメントの中にパッケージされ個別に完結するという個別化が図られるようになった。これらの要因によって、近年の医療ソーシャルワーク業務は内向きとなり、ソーシャルワークのグローバル定義が示すような「社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する」ことから、距離が生まれている。

また、戦前の萌芽期以来の医療ソーシャルワークの歴史をふり返り、1980年代以降、業務が「退院援助」業務に重点化していることを明らかにし、その面からも内閉化傾向は促進されている点を明らかにしている(3章)。

第II部では4章で、日本医療社会事業協会の機関誌『医療と福祉』の実践事例投稿論文32本(1964～2020年)の分析を通して、社会へ働きかけてゆく実践の原型を1980年代に見出し、当時の医療ソーシャルワーク実践事例を分析し、社会への働きかけの具体性を提示している。5章、6章では医療ソーシャルワーカーに対するビネット調査及びインタビュー調査を実施し、現在の連携・協働における医療ソーシャルワーク機能の構成要素および要素間関係を分析し、外向き姿勢へ転換するための以下の二つの視点を明示している。

第一に、医療ソーシャルワーカーが実践する社会への働きかけとは、「社会的な問題の解決あるいは緩和を目指し、主体である患者、家族の生活世界として広がっている多様な関係性へ共感的対話と協働を重ねるプロセスを通し、エンパワメントし合う相互作用を促す多面的なアプローチの総体」であることを明らかにしている。

第二に、共感的対話と対象認識の重要性を明示している。医療ソーシャルワーク業務がマネジメントに絡めとられないために、人と向き合い共感的対話に意識的であること、加えて、社会的な問題として外に向かう視点は、内向き姿勢のマネジメント化を克服する可能性があることを示

している。具体的には、①業務を超えたつながり、②ソーシャルワーク経験ができる環境と仕掛け、③外来での継続的関わりという3つの方法を提言している。

医療ソーシャルワーカーとしての長年にわたる実務経験で得た、近年の医療ソーシャルワークのマネジメント重視＝内向き志向への疑問から出発し、①それが生み出されてきている背景を探るとともに、②歴史的資料の検討や医療従事者に対する質的調査などを通してそれを克服する方途を探る、という2つの大きな課題に挑戦し、それぞれについて、上で述べたような新しい知見を得ている。これらの知見は最近の医療ソーシャルワーク研究の動向とは大きく異なるものであり、研究界に一石を投じる内容のものとなっている。

よって、本論文は、博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2022年1月5日

論文題目： 社会へ働きかける医療ソーシャルワーカーの可能性
ーマネジメント化による内向き姿勢を克服するためにー

学位申請者： 小畑 美穂

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 埋橋 孝文

副査： 社会学研究科 教授 小山 隆

副査： 県立広島大学保健福祉学部 教授 田中 聡子

要 旨：

2021年12月27日(月)15時から1時間40分にわたり、申請者による公開学術講演会を溪水館1階会議室においておこなった。引き続き、16時50分から約1時間にわたり、上記3名の主査・副査による口頭試問を社会福祉学科資料室においておこなった。

公開学術講演会において申請者は博士学位申請論文に関する講演をおこない、医療ソーシャルワークが内向き姿勢になる要因を明らかにし、その上で、それを克服するための原理と具体的な方法を提示した。二人の副査および講演会出席者からの質問に対しても的確に回答した。

また口頭試問において、審査委員からの学位申請論文内容と社会福祉学に関する質疑に対して的確に回答し、豊かな知識、学力を有していることを証明した。同日(18時~18時40分)に社会福祉学科資料室で実施した語学試験(英語)においても、十分な語学力を有していることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：社会へ働きかける医療ソーシャルワーカーの可能性

ーマネジメント化による内向き姿勢を克服するためにー

氏名： 小畑 美穂

要旨：

本研究は、現在の医療ソーシャルワーク業務が、マネジメント化によって内向き姿勢の傾向にあることを示し、その要因を明らかにすることで内向き姿勢を克服する方法論を見出すことを目的とした。

第Ⅰ部は、業務のマネジメント化によって内向き姿勢となる要因を明らかにした。

第Ⅱ部は、内向き姿勢を克服する医療ソーシャルワーカーの可能性を社会への働きかけから試論した。

近年の医療ソーシャルワーク業務は、実態から 8 割におよぶ業務が退院の支援となっている。その退院の支援が、多職種や地域との連携・協働を通して遂行されている。

活動分野とする医療、特に急性期医療においては、合理的システムが重視される。多様な主体のまとまりや秩序が必要となる連携・協働の場面、特に体制・ネットワークづくりのプロセスにおいて、連携・協働するチームのマネジメントが要請される。そのチームのマネジメントを現在、医療ソーシャルワーカーは、媒介的調整機能として担っている。マネジメントがもつ管理・統制が、医療ソーシャルワーク業務の連携・協働を通し、媒介的調整機能として定着化する影響を与え、業務がマネジメント化する要因となっていることを明らかにした。

その結果、医療ソーシャルワーク業務は、病院と地域とその接合点、つまりマネジメント化されたネットワークの中で往来し、業務は内向き姿勢の傾向となることが示された。

さらに、社会変革や新しく資源を作りだすことをイメージする「社会への働きかけ」は、地域の体制づくりとして多職種等の連携・協働という活動に置き換わりつつあることが本研究によって明らかになった。

すなわち、現在の医療ソーシャルワーク業務が連携・協働およびネットワークという枠組みに、患者をおさめてゆくという管理的要素、つまり、マネジメントの必然性に誘引されていると考える。このことは医療ソーシャルワーク業務が内向き姿勢になる要因の一つととらえる。

マネジメント化する業務は、患者をマネジメントの枠組みにおさめ、組織や社会の統制および秩序の形成に向かう。患者への支援は、その人それぞれの意向、生き方を大切にする個別性、独自性の尊重ということ以上に、支援者が構築した支援側にとって安心・安全で合理的かつ画一的なサービスのパッケージド・ケアが提供されるようになる。

その結果、組織や地域の中の仕組みやサービスという枠や提供するケアのあり方にあてはまるものが望まれる状況を生み、枠組みにおさまらない人や状況は、仕組みやサービスの枠から排除、除外されてしまう。

次に、このような状況を生み出す背景を探索するために、医療ソーシャルワーク業務の変遷について 1920 年代の萌芽期より社会的、歴史的に整理した。内向き姿勢になる要因として、1980 年代以降の 1) 医療・介護政策、および診療報酬による位置づけ、2) 英米からわが国へ導入されたケアマネジメント概念からの影響が大きいことが明らかになった。その中で、1980 年代は、社会福祉に新自由主義の潮流とマネジメントが流入してくる転換期としての挟間であり、分界地点であった。また、医療ソーシャルワーク業務にとって政策による規制や管理からの影響が現在よ

りも少なく、活動の自由度の高さと社会資源の未整備という要素が重なり合ったタイミングであったといえる。ゆえに、1980年代の医療ソーシャルワーカーの実践は、社会への働きかけといえる活動が比較的活発にみられた時期であった。

そこで、マネジメント化による内向き姿勢を克服する方策、つまり、外向きへ転換できる方法論的可能性を探るために、社会へ働きかけてゆく実践の原型を1980年代に見出し、当時の医療ソーシャルワーク実践事例から、社会への働きかけの具体性を探った。

80年代に行われた社会へ働きかける実践事例を分析し、医療ソーシャルワーカーが実践する社会への働きかけの具体性について概念化および類型化した。そこから4つの準拠枠：【主体との協働による外的変化】【主体との協働による内的変化】【医療ソーシャルワーカー／チーム主導による内的変化】【医療ソーシャルワーカー／チーム主導による外的変化】を構築した。

医療ソーシャルワーク実践における社会への働きかけには、患者の暮らしを社会関係に開かれた生活の権利として保障する取り組みが中核にあった。医療ソーシャルワーカーがとらえている社会とは、患者の暮らしにつながる人やものごととの関係性であることが示されていた。その上で、傷病によって閉ざされた、あるいは狭められた社会生活のつながり、つまり関係性の構築／再構築の実現を目指していた。この時、医療ソーシャルワーカーは、社会福祉調査によって阻害要因を把握しエビデンス化することで、関係性から生起する社会的な問題と認識し、組織化を試みていた。また多くの社会的な問題は単独では対処が難しく、共感的対話と協働を重ね組織化し、人の意識変容、価値の共有・創出、ならびに社会の仕組みづくりに作用し組織的に阻害要因の解決に向け取り組んでいた。

医療ソーシャルワーカーが実践する社会への働きかけは「社会的な問題の解決を目指し、主体である患者、家族の生活世界として広がっている多様な関係性へ共感的対話と協働を重ねるプロセスを通し、エンパワメントし合う相互作用を促す多面的なアプローチの総体」と概念化した。

続いて、内向き姿勢から外向きへ転換する示唆として以下の四点を導き出した。第一に、起点となる問題意識である気づきや違和感の重要性。第二に、社会的問題としてとらえる対象認識の重要性。第三に、一連のプロセス全体を踏んでゆくことの重要性。第四に、急性期における外来支援を中心に、入・退院支援を包括的にとらえる継続的支援の重要性である。

以上の80年代の社会へ働きかける実践分析を踏まえて、現在、実践されている連携・協働における医療ソーシャルワーカーが重視する機能の構成要素および要素間関係をビネット調査により明らかにした。

構成要素として、4カテゴリー、12コードが析出された。また、要素間をつなぐ《確認》が重要な要素として明らかになった。《確認》は、患者本人の「思い」をつなぐ、その先の相手の思いを開く、また支援者ネットワークのウチとソトを突破する働きかけの要となっていた。《確認》とは、本人の主体性を中心に、本人が医療や支援関係から取り残されないための基礎的要素であり、要素間をつなぐ要であることが明らかになった。

続いて、《情報》がマネジメントを誘引することを明らかにした。資源も含めた多様な情報に、マネジメントが連関している。情報は、効率・効果的に、つかんだり、組み合わせたり、つないだり、まとめる、管理・統制が必要になる。特に、多様な主体が連携・協働する状況においては、情報量が各段に増え、その危険性が生じやすい。さらに情報へ積極的に接近する医療ソーシャルワーカーにとって、マネジメントに融合される機会が高くなる。連携・協働における医療ソーシャルワーカーが重視する機能の構成要素において、5因子に管理、統制することを目的としたマネジメントが内包されていた。

加えて、連携・協働において医療ソーシャルワーク業務のマネジメント化を克服する要素として、二つの重要な示唆が導き出された。

第一に、〔共感的対話〕である。医療ソーシャルワーカーが《情報》を「人」よりも優先させないためにも、クライアントと向き合い、ともにあるという〔共感的対話〕に意識的に立ち戻るこ

とを繰り返し行うことが重要であることが明らかになった。

第二に、対象認識について、連携・協働は、構造的に対象をネットワークの内側のマネジメントに収斂させてしまう傾向がある。医療ソーシャルワーカーは、対象認識を個人の生活問題として完結させるのではなく、意識的に社会的な問題として認識を転換する指向が重要である。社会的な問題として外に向かう、広げる視点は、内向き姿勢のマネジメント化から克服する可能性を示している。

したがって、医療ソーシャルワーク業務が内向き姿勢を克服し外向きへ転換する示唆が得られた。クライアントである患者と向き合う〔共感的対話〕の視座であるマイクロ実践と、マイクロ、メゾ、マクロレベルの実践を循環（社会・環境の視点）することの重要性である。このマイクロ、メゾ、マクロの実践領域を循環する作用メカニズムとして、社会への働きかけが重要な原動力となることが明らかになった。

さらに、明らかになった二つの示唆をもとに、内向き姿勢から外向きへ一歩踏み出すための具体的な方法を探った。ビネット調査に協力同意を得た医療ソーシャルワーカーへ補足的インタビューを行い以下三点の重要な要点を得た。

第一に、【業務を超えたつながり】が組織化（「社会への働きかけ」のプロセス）への一歩。第二に、【ソーシャルワーク経験、体験、覚悟】ができる環境・仕掛けづくり（問題意識、対象認識）。第三に、患者と【外来での継続的にかかわり】（問題意識、対象認識）である。

マネジメントを求められる現在の医療ソーシャルワーカーの業務は、豊かなマイクロ実践が希薄化し、より原点であるマイクロ実践は重点化される。原点が意味するクライアントとのかかわりの具体性は、支援する側である専門職と支援を受ける側のクライアントという枠組みを超えた非効率的な余白の中にヒューマニズムや豊かさが現れることで示された。

以上、医療ソーシャルワーカーが業務のマネジメント化による管理的傾向を克服する方法として「社会への働きかけ」を論究することによって、医療ソーシャルワークが本来もっている可能性を再評価するきっかけとなった。